

写真投影法による河川景観の構造の分析

九州産業大学工学部 正 員 山下三平
九州産業大学大学院○学生員 高島律夫
九州産業大学工学部 志方英紀

1. はじめに

著者らは人間の河川環境に対する理解を把握するために「写真投影法¹⁾」を適用し、成人と子供の認識の比較をとおして、筑後川中流域(田主丸)の河川景観の全般的な構造を検討してきた²⁾³⁾。本研究ではこの検討をさらに進め、この地域の特徴的な領域区分ごとに同様の分析を行ったので報告する。

2. 調査地域の概要と分析の方法

調査対象地域は筑後川中流域に位置する田主丸全域である。調査を行った田主丸は筑後平野北東部で筑後川と耳納連山の間にあり耳納連山から流れ出てくる多くの川と町の中心を流れる巨瀬川があり北の方には筑後川が流れていて住民の水に対する関心が強い町である。

分析は1993年8月17日から8月31日に行われた調査のデータを基に映像構成要素(ゴミの有無、人物の有無、動物の有無、樹木の有無、護岸の有無、建物の有無、緑の割合、水面の割合、景観の種類)と主対象の相互関係を数量化3類とクラスター分析により調べ、<景観の種類>の違いに基づいて分類する

と、成人の場合6つのクラスターに、子供の場合5つのクラスターに別れる²⁾。一方、民俗学的資料から対象地域を分類すると、1)「筑後川沿川」、2)「筑後川と巨瀬川の間」、3)「巨瀬川沿川」、4)「巨瀬川以南」にわかれる⁴⁾。

「筑後川沿川」は田主丸で一番北に位置しており、釣人が多くグラウンド、公園などがあり、娯楽のための人々が数多く見られる。また大小の河川構造物が存在する領域である。

「筑後川と巨瀬川の間」はたんぼと農業用水路が多くを占めている領域である。そのため一般の人々の姿はあまり見られない。

「巨瀬川沿川」は町の中心であるため交通量も多く、視点場や主対象となる橋も多い地域である。また学校帰りの子供が多く見られたが、川に入っている子供はあまり見られない。

「巨瀬川以南」は水縄山地の山麓から巨瀬川の南岸までの地域で山から流れてくる小さな河川が多い。しかし子供が川で遊ぶ風景はあまり見られない。

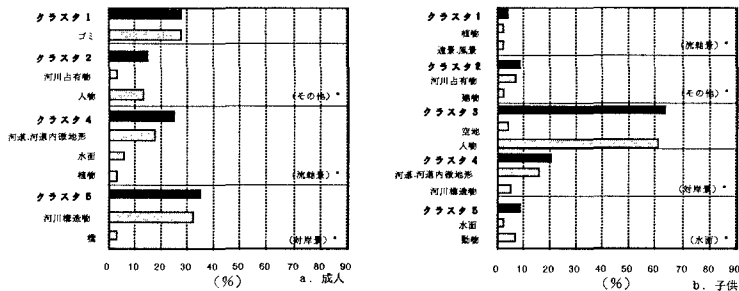


図1 筑後川沿川の河川景観のパターンとそれを構成する(主対象)の出現頻度分布

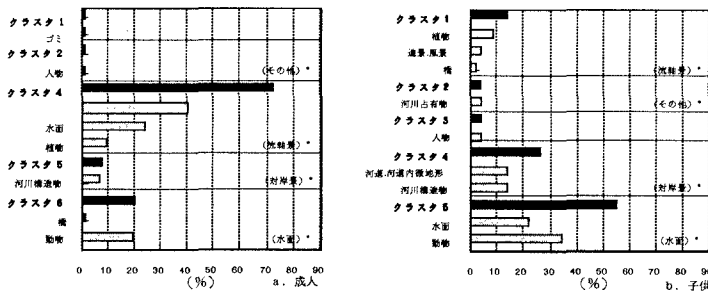


図2 筑後川と巨瀬川の間の河川景観のパターンとそれを構成する(主対象)の出現頻度分布

以上の4つの領域ごとに河川景観の構造を全般的に表わす上述のクラスターの出現頻度を調べた結果を以下に示す。

3. 領域区分ごとの特性分析

図-1から図-4に、「筑後川沿川」、「筑後川と巨瀬川の間」、「巨瀬川沿川」、「巨瀬川以南」の領域に分けた河川景観の頻度分布を示す。

筑後川沿川の領域において、成人は他の領域とは撮影の仕方が異なって<流軸景>が必ずしも多くないのがわかる。これはこの領域が広いグラウンドや公園があり、人々が幅広く視点場や主対象を選ぶことができる環境であるからだといえる。また子供においてはクラスタ3、その中でも人物の割合が多くを占めているのがわかる。これはこの地域の親水性の高さを表わしていると思われる。

筑後川と巨瀬川の間領域においては子供はクラスタ5の<水面>を全面に写す景観の割合が多くなっているのがわかる。これはこの地域が田んぼや用水路などがあるため対象物に近づいて撮影されたためと思われる。

巨瀬川沿川の領域においては、子供はクラスタ4の<対岸景>の割合が多くなっているのがわかる。ここでは、子供が成人に比べて景観を平面的に見る傾

向が強いと思われる。

巨瀬川以南の領域において、成人はクラスタ4の<流軸景>がほとんどの割合を占めている。これは川幅のせまい小さな川が多くあるため、立体的構図で景観をとらえる成人の傾向が際立って現われたものと思われる。

4. おわりに

以上のように、筑後川中流域の河川景観の全般的な構造把握をもとにして、この地域の特徴的な領域ごとの景観特性を明らかにすることができた。今後はさらに視点場を細かく分類して河川環境と景観認識との関係を検討する予定である。

参考文献

- 1) 野田正彰：漂白される子供たち、情報センター出版局、1988.
- 2) 山下三平：写真投影法による河川景観の構造に関する研究、土木計画学研究・講演集、No.17, pp.367-370, 1995.
- 3) 山下三平：写真投影法と景観の原イメージの概念に基づいた中小河川の景観分析、河川、河川風景とその技術史的検討に基づいた中小河川の景観設計、河川整備基金助成事業平成5年度報告、pp.72-85, 1994.
- 4) 日野文雄：田主丸地方の水辺の生活誌、河川、河川風景とその技術史的検討に基づいた中小河川の景観設計、河川整備基金助成事業平成5年度報告書、pp.24-53, 1994.

